

中山間地における学外実習：福岡県黒木町における 環境・遺産デザインプロジェクト演習1の実施

谷，正和
九州大学大学院環境計画部門

重松，敏則

朝廣，和夫

富板，崇

他

<https://doi.org/10.15017/2794867>

出版情報：芸術工学研究. 10, pp.77-85, 2009-03-31. 九州大学大学院芸術工学研究院
バージョン：
権利関係：



中山間地における学外実習

福岡県黒木町における環境・遺産デザインプロジェクト演習 I の実施

A Field Project in a Mountainous Area

A Report on Environment and Heritage Design Project I in Kuroki, Fukuoka

谷正和	重松敏則	朝廣和夫	藤原恵洋	富板崇	石村眞一	原愛子
TANI Masakazu	SHIGEMATSU Toshinori	ASAHIRO Kazuo	FUJIWARA Keiyou			
TOMIITA Takashi	ISHIMURA Shinnichi	HARA Aiko				

Abstract

The Environment and Heritage Design Course of the School of Design, a new course started in April 2008, aims to train its students to have design capabilities that evaluate, preserve, and create the values of natural and cultural resources inherent to the local community. Therefore, it offers an integrated educational program including three main field projects in which students acquire hand-on experience in the context of real lives. One of the three, the contents and evaluation of Environment-Heritage Project I is reported here. This project class was conducted in Kasahara area in the town of Kuroki, Fukuoka Prefecture. The purpose of this report is to present the contents of the project class, and to discuss the ways in which such a University-driven project to serve social purposes and to communicate such a purpose to students.

1. はじめに

平成20年4月に改組・発足した芸術工学府、環境・遺産デザインコースは、過去から現在、未来へと受け継いでいく資産＝「環境・遺産」の価値を、文化の多様性を尊重しつつ、評価、保全・活用、創成していくデザイン能力の養成を目的とし、このような環境・遺産デザインが、人間による営為の生態的、空間的な調和をめざすと同時に、時間的な視野を持ち、異なる価値観にも配慮をもって行われるべきであるとの理念に基づき、国内外の地域をフィールドとした実践的な教育を展開している。

そのため、環境・遺産デザインコースの教育プログラムは、フィールドで学生が現実の人々の生活、活動に浸り、その経験に基づいた調査研究を行う場を提供する3つのプロジェクト科目を基幹科目としている。その中の一つ、「環境・遺産プロジェクトI」は中山間地の生活の理解をテーマとして、福岡県八女郡黒木町笠原地区をフィールドに演習を実施した。本論の目的はその内容を報告すると共に、大学が机上の計画立案を越えて、その研究を現実の問題に直接立脚させ社会的責務を果たす方法、および、研究手法のみならず、そのような研究の理念を学生に伝える枠組みを模索することにある。

実際に対象とする地域に出かけ、聞き取り、観察、体験といった手法でフィールド調査を行うことは、地域の環境や資源を探る基礎研究であることは言うまでもない。また、大学での講義によって学習した内容を実社会で検証する上でも、フィールド調査は不可欠なものである。但し、十分な事前学習や精緻な計画、調査データの的を射た分析を行わないと客観的な調査結果を得ることは難しい¹⁾。

実際にフィールド調査を行うと、予期せぬ内容、出来事に直面することが多々ある。おそらく、事前学習によって得た

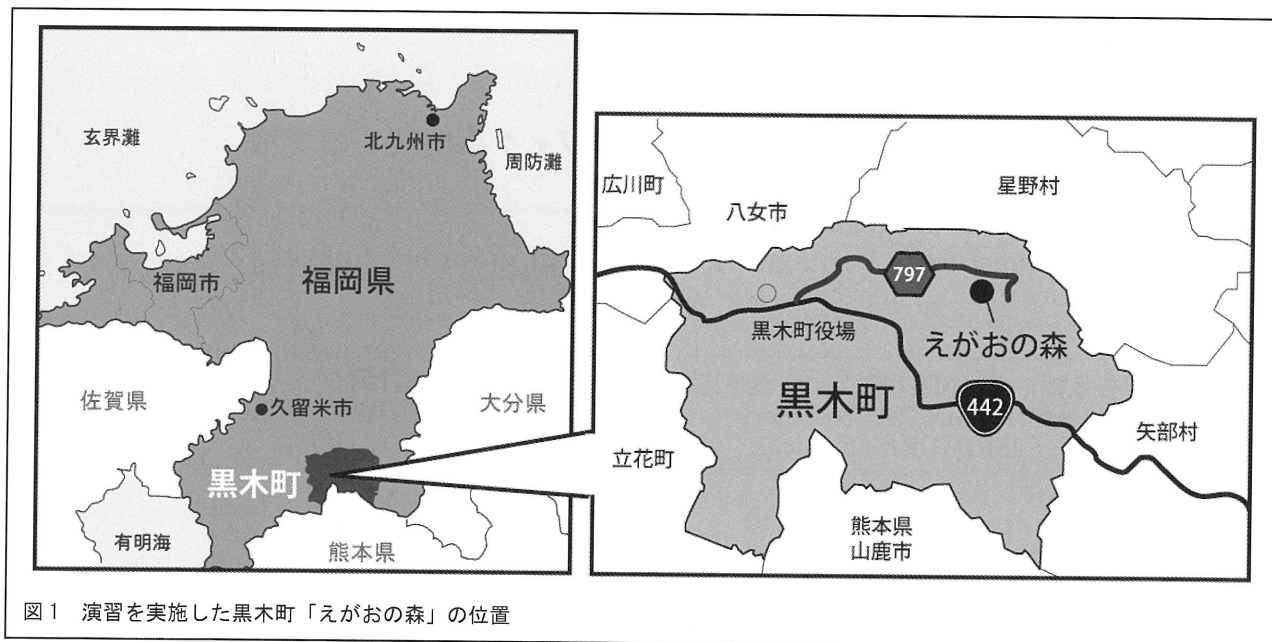


図1 演習を実施した黒木町「えがおの森」の位置

知識では理解し難い内容に出合ったということになる。換言すれば、簡単には予測できない実態が地域には存在し、数多くの要因が複雑に絡み合っ環境や資源が形成されたという見方もできる。こうした要因を体感して検討することがフィールド調査の醍醐味である。今回のフィールド調査は5名の教員と22名の学生で実施するというものである。グループ内でのミーティング、宿泊地で行う全員参加でのプレゼンテーションを通した課題の抽出、検討は、学内の授業では味わえない演習の成果が創出できると想定した。

2. 実施対象地の黒木町笠原地区の概要とその選定経緯、意義

2.1 実施対象地の概要

「大藤(国指定の天然記念物)」で有名な黒木町は人口約1万5千、熊本県と境を接する福岡県最南部に位置し、福岡市からは約60km、車で約1時間半ほどの距離にある矢部川流域の山村である(図1)。笠原地区は町内の東北端に位置し、黒木町の中心部からはさらに8.3kmの距離にあり、矢部川の支流笠原川に沿った限られた平地およびその周囲の斜面に散在する小集落によって構成されている。笠原地区は伝統的に林業と斜面に展開する棚田による農業を生業としてきたが、林業の全国的な不振や農業政策の転換による影響を強く受け、現在ではお茶の生産を主な生業としている。笠原地区の人口は年々減少を続け、昭和40年には2500人を超えていたが、平成12年には1500人を割り込んだ。多くの中山間地と同様に、年齢構成も高齢化し、平成16年3月には、地区内にあった笠原東小学校は児童の減少により休校した。

2.2 実施拠点施設について

休校したこの木造・瓦葺き屋根の校舎(写真1、文末)は、地域の人々の思い出のこもったものであり、廊下や教室のたたずまいは、都市から訪れた人にとっても懐かしさや木の温もりを感じさせるものであったことから、この元小学校を都市と農山村の有機的な交流の拠点とするため、平成16年9月に黒木町と九州大学芸術工学研究院は、包括提携の覚書を締結した。これにより、ここを環境共生の体験施設としても活用することを意図し、学生達との手作りによる「五右衛門風呂」及び「おが屑パイオトイレ」の建設、薪ストーブの設置、ならびに、グリーンファンドの助成による太陽光発電パネルと小型風力発電機の設置を行った。このような中で、重松らはこの元小学校の校舎を、田植え・稲刈りなどの学外演習や国際里山・田園保全ワーキングホリデーの合宿に活用してきた²⁾。

校舎の利用に対する参加者の感想は概ね好評であったが、便所が汲取り式であり、サイズが小さいことや臭いの問題が改善すべき点として数多く指摘された。このほか、教室の床板に布団を敷くことや、先に設置した五右衛門風呂だけでは大人数の利用に対応できないことも、改善すべきと考えられた³⁾。これに対して町当局から申請した「元気な地域づくり交付金事業(農林水産省:50%、福岡県:10%)」の助成により、平成18年11月~19年2月に以下の事業が実施された。

校舎の外壁・屋根の塗装
薪ボイラーの設置
シャワー・浴室の設置
簡易水洗トイレへの改装
調理台の嵩上げ

給湯設備

教室への畳敷き

以上の整備により、本施設の利便性及び快適性は大きく高まることとなった。

このような経過の中で、この元笠原東小学校は、校舎や校庭は町の所有のままで「笠原東交流センター(愛称: えがのおの森)」として活用するものとし、管理運営を地元住民の有志からなる指定管理者「笠原里山振興会」に委託する方式をとることとなった。

以上のような経緯から、この施設は本デザインプロジェクト演習の実施・宿泊拠点として最適であること、また、周囲を棚田と里山に囲まれて5つの集落が点在すること、さらに、これまでの活動の取り組みの中から地元住民の信頼感が得られていることから、演習の対象地として選定した。

2.3 演習の枠組みとした「地元学」について

地元学とは、学問ではなく、“地元”に“学ぶ”ことである。地域のことを、地元の人と地域外の人が共に調査し、地域にあるものを見つめなおして、地域づくりへと活かしていくという取り組みである。提唱者の一人である吉本哲郎氏によれば、「地元学とは郷土史のようにただ調べて知るだけでなく、地元の人が主体になって、地元を客観的に、地域外の人々の視点や助言を得ながら、地元のことを知り、地域の個性を自覚することを第一歩に、外から押し寄せる変化を受け止め内から地域の個性に照らし合わせ、自問自答しながら地域独自の生活(文化)を日常的に創りあげていく知的創造行為」⁴⁾であるという。

この地元学では、地元の人を「土の人」、地域外の人を「風の人」と呼ぶ。風の人を聞き役、土の人を案内役として、地域を歩き回り、地元にあるものを探していく。外の人々の視点を借り、地元の人が普段気付かなかった、実は魅力的なものや、その地域独特のものを再発見する活動を行う。

そしてこの取り組みは単なる「あるものさがし」にとどまるのではなく、地元学を実施することにより、地元の人自身が自分の住んでいる場所を再認識し、これから地域をどうしていけばいいか考え、行動に移していくきっかけとなることが期待される。

3. 授業の概要と演習内容

環境・遺産プロジェクトⅠの演習は「えがのおの森」を拠点として、平成20年5月17日～18日に実施された。この期間、笠原地区を対象に、フィールド観察、聞き取りにより、地域の自然、農業、林業、生活文化、生活・産業用具を記録し、地域社会の実態に関する総合的な調査を行った。実際の笠原地区の演習では、聴き取り対象となる地元住民の負担を分散させるため、受講者を5つのグループに分け、各グループはそれぞれテーマを設定し調査を行った(写真2、写真3、文末)。

調査分析結果は履修者によってまとめられ、発表・討議が行われた。さらに、笠原地区での演習ののち、そこでの経験、情報をもとに、「えがのおの森」を拠点とする地域活性化計画が受講者により立案され、5月28日にその計画案の合評会が開かれた。

3.1 利水に関する伝統的テクノロジーの調査班

受講生の多くは都市で育ち、水といえば都市河川や蛇口をひねれば出てくる水道水を連想するだろう。本対象地のような中山間地域の山林は水源涵養機能を果たしている。森林に降る雨は山清水となり、棚田や茶畑をうるおし、笠原川となり矢部川に合流する。これらの一連の水の流れは長い年月にわたる山村の人々の水との関わりの集積であると言え、これらの利水システムは地域独自の伝統的テクノロジーを形成している。

特に本地域は、営々と引き継がれた棚田が特徴的である。自然材の石・土・木などを用いて山の上部から棚田へ水を導き、段々に下の棚田に水を流す灌漑技術を用いている。夏季は棚田に水を入れてイネを栽培し、冬季は水を抜いて乾かし、昔はムギやナタネが栽培されていた。このようなシステムは化石エネルギーがなく、セメントなどの工業製品もない時代から続けられており、毎年水を入れ替えることで輪作障害もなく、極めて優れた農耕技術である。

都会人や学生達は棚田の土や泥に触れる機会があれば、水の温もりに無邪気に驚き、農林業体験を楽しむことができる。しかしながら、営々と継承されてきた水の恵みと先人の知恵を理解すれば、持続的な自然と人間の互いの依存関係の重さに気づき、守り、次の世代に伝えようとするだろう。本演習で利水に関する伝統的テクノロジーを調査する手法は、地域に残存する棚田や水利設備などの物的状況を切り口に、地理的、生物学的観点も加えながら河川や山林、植物、そして社会的関わりに至るまで、平面スケッチ、断面スケッチを描きながら調査の範囲を広げていく方法である。このように芽づる式に、空間的に調査を行いその関係性を俯瞰することは、調査範囲の自然共生システムの利点と課題を抽出し、改善に向けた具体的な提案を導き出すことを目的としている。

本調査班の受講生は中山間地域における経験が少なく、また、本学部を卒業しているわけではないので、事前の知識が不足し戸惑いがあったかもしれない。調査の導入は、「えがのおの森」の対岸にある「水車」とその周辺環境、および流域に残存する線香工場を訪ね、前述の調査を実施した。受講生からは、地域活性化のために水車を復活し、訪問者が水と接して癒される空間の提案が行われた。

3.2 茶摘みを中心とした農地管理の実状と動態保全の調査班

笠原地区にある5集落のうち、最奥部に位置する「上松尾」集落を対象に視察、ならびに聞き取り調査を実施した。当地域の主

生産物である茶摘みの最盛期であったため、5カ所で行った聞き取りは、(1)作業の手を一時的に休めてもらう、(2)作業をしながら、(3)作業を手伝いながら、(4)作業が終わった段階でなど、その場の状況に合わせた方式で実施した(写真4、文末)。

5カ所のうち3カ所で、「被せ茶」の手摘みが行われていた。「被せ茶」とは、茶の木の新芽が十分に伸びる前に、茶畑全体に木や竹で組んだ支柱と竿を、人間の背たけ程度の高さに架け渡し、コモや寒冷紗で覆い被せて遮光することにより、茶葉の渋みを抑え、甘味を引き出すとともに、緑色の濃い製品にするものである。手摘みされた製品は、一般的に行われている機械摘みのものより付加価値は高いが、手摘みに人手がかかるため、あまり利益は得られないにもかかわらず、良いものを作りたいという生産者のこだわりで、手摘みを続けているとのことであった。人手は親類縁者を総動員したり、久留米市や八女市など平地の稲作農家との相互の労働支援で賄っているそうで、賃金も支払われている。昼食には自家製の弁当が用意されていたが、弁当代は徴収される。

また、別の茶畑では、老人1人と息子夫婦の3人で、機械摘みが行われていた。ここでは、列植された茶の木の列ごとに直接、寒冷紗で覆われており、老人が寒冷紗を取り除き、夫婦が茶摘み機を列の両側から支えて、摘み取りが行われていた。手摘みに比較して、明らかに少人数で作業が進むことが分かった。

その後、茶摘みが終了した家族(主婦と青年2人)に出会い、主婦から聞き取りを行った。役所勤めの傍ら兼業で、稲作と茶畑の管理をしており、ほぼ休日は農作業に追われているが、やりがいがあり、自然の中でリフレッシュできることに幸福を感じるの、やめられないとのことであった。収穫物は自家用の他には販売せず、親類や知人にプレゼントしており、それがまた楽しく、充実感が得られるそうである。聞き取りの後で、「今年の茶ですが、どうぞ皆さんで」と真空パックされた多数のお茶をいただいた。

さらに、1軒の農家を訪ね老夫婦から聞き取りを行った。奥さんは家のすぐ下のなだらかな傾斜面の畑で、列植された茶の木の苗の間に生える雑草を除草中であった。主人の話では去年までは棚田だったが、茶畑にするために中古のユンボを購入し、自ら操作して茶の栽培に適した、水はけのよい傾斜面に改変したそうで、ユンボの操作を実演していただいた。また、屋敷と畑の間の石積み擁壁にヤマイモの蔓を這わせていたが、「ヤマイモを掘り取る時はたいへんでは」という質問に対して、縦い溝を切った塩ビパイプを浅く水平に埋め込み、その中でイモが伸長するようにしているので、収穫は簡単とのこと、その工夫に一同は感嘆した。

3.3 伝統的生活文化の継承に関する調査班

笠原地区の自家製味噌の使用実態を調査し、戦後の経年変化について考察することを目的とする。

事前学習の内容は次のようなものである。

- ・麴の種類—北部九州は麦麴が主で、米麴と合わせ麴も使用される。
- ・味噌を仕込む時期—西日本は秋に仕込む地域が多い。
- ・味噌を貯蔵する容器—北部九州は伝統的に桶と甕の両方が使用されている。近年はプラスチック製の容器が大半を占める。
- ・自家製味噌の使用率—北部九州は農家だけに限っても10%以下と推定される。

調査結果は次のような内容である。

(1) 鹿子尾地区での自家製味噌に関するフィールド調査

屋敷地区の農家を訪ね、聞き取り調査を行った。聞き取りは学生が主体で行ったが、一部教員が補足した。現在自家製味噌をつくっている農家はなく、10年以上前に結いによる集団での味噌づくりは終わっている。貯蔵容器は甕を使用していたようである。味噌づくりをやめた理由は、集落による結いが機能しなくなったことに起因している。

屋敷地区には天満宮の小さな祠があり、その中に太宰府天満宮の名物となっている梅ヶ枝餅は、元々は中身が餡ではなく味噌であり、その原型の餅は黒木町に伝承されているといった新聞記事が掲示されていた。

(2) 「えがのお森」での聞き取り調査

笠原地区にみそづくりのサークルがあり、そのメンバーの方にわざわざおいでいただいて味噌づくりの話をうかがった。

笠原地区の味噌づくりに使用する麴は、戦後間もない時期まで麦麴を使用していた。ところが、お茶の栽培が盛んになり、茶摘みと製茶作業が大麦の刈り取り時期と重なるため、大麦の栽培自体を行わなくなった。その結果、従来の麦麴から米麴に変化した。次に味噌づくりの方法について話をうかがった。レシピがサークル内でつくられており、麴づくりを中心に実際の方法を学習した。晩秋につくられるようで、何本かの一升ビンにお湯を入れて布団にくるみ保温するという方法で対応されている。

(3) 「四季菜館」での聞き取り調査

椿原地区の「四季菜館」では、味噌づくりを行っている。但し、この場合の味噌造りは自家製味噌だけの目的ではなく、販売を前提としている。麴は購入し、機械によって加工している。それでも写真5(文末)に示したように伝統的な甕で貯蔵している。

3.4 コミュニティの空間的構成と社会的まとまりに関する調査班

この班は庄屋村集落を調査対象とした。この集落は笠原側の右岸の小高い土地に展開し、現在14世帯が居住している。その名前が示す通りかつてこの地区の庄屋が存在し、コミュニティの中心的役割を果たしていたと想定された。そのため、調査では祠、石碑などの観察、聞き取りから集落空間の階層性に関する手掛か

りを得ようと試みた。集落内では梵字の刻まれた石碑1塔、近年建設された石碑1塔、祠1か所、観音堂1か所が記録された。しかし、あいにく、調査時はこの地区のおもな産業であるお茶の摘み取りの最盛期にあたっており、これらの碑・祠に関するいわれについて聞き取りを行うことができなかったため、集落空間の意味を明らかにすることができなかった。

そのため、第1日の後半の調査では、集落、地区の連帯を強化するような行事についての聞き取りを行うこととした。それによると、集落ごとの自治会の会合は毎月行われているものの、かつて共同で行っていた水田のための水路の管理などは、お茶栽培に転換した現在は行われなくなっていた。複数の方から、地区の祭りの担い手が不足し、開催できなくなりつつあることに対する危惧が聞かれた。地区内で特に子供の減少からコミュニティの紐帯となっていた笠原東小学校の休校により、運動会も開催されなくなった。この小学校の運動会は祭りと並んで地区住民の多くが参加していた数少ない行事であったが、それがなくなったことを惜しむ声も多かった。

この結果を受け、演習の課題である笠原東地域交流センター「えがおの森」を拠点とする地域振興活動案とも関連して、調査第2日目には、地区住民のつながりを強化するような活動・行事に関する聞き取りを目的とした。地区内の住民が茶摘みに出掛けていることも考慮して、地区の象徴である霊巖寺に行き、そこを中心とする地区行事について聞き取りを行った。そこでは毎月縁日が開かれ、福岡市などの遠方からも参加者が集まるとのことで、地区内の住民の方からもこの縁日を楽しみしているということも聞かれた。この後、地区内のもう一つの宗教施設である大善坊にも足を運んだが、このお寺の方が不在でこの施設で開かれる行事について聞き取りを行うことができなかった。

3.5 「風の人」の創造触発作用と森林保存再生の先導的効果に関する調査班

地元学では、地域社会を構成する人を「風の人」と「土の人」の二つにわけ、この二つが見事に調和してこそ素晴らしい「風土」が織り成されることを示唆している。

ところで、ここで言う「風の人」とは、吹いて来る風のようにいつどこからともなく渡来し、一時的にその地に住み暮すことはあっても、やがてまたどこかへ去って行く人を示す。いわば、先祖伝来の田畑や家屋敷の継承に関わらず、地域社会に根を降ろさず、根を張らない、そのような一過性的な立ち寄り者や通行者のことを言うのであろうが、近年の過疎地や限界集落を抱えた地域社会における行政課題のひとつは観光や地域資源に惹かれて地域社会へ出入りする「交流人口」を積極的に導入し、どのように有意義な交流・交歓を生み出すか、ということにある。したがって、旧来の「風の人」効果のみならず、いったん地元を離れて戻

ってくるリターン者に加え、地方で生まれ育った人が一度都心で働き、その後故郷とは違う別の地域に移住するJターン、都会からまったく身寄りもない地域へ移住するIターン等、外部からの流入パターンもより幅が広がっている。

本班は当地における「風の人」効果の検証を、笠原地区の霊巖寺対岸に住む木工家・西岡泰心氏に求め、聞き取り調査を通して、氏の活動の中から、・創造触発作用、と・森林保存再生の先導的効果を分析した。

西岡氏は1949年（昭和24年）山口県宇部市生まれ。学生時代の1969年より1年半のアメリカ・カナダ放浪見聞を通し知見を広げた後、1976年に遅れて木工を志し、埼玉・山口・福岡の各県で木工所の弟子として研鑽を積む。1983年に笠原の古刹・霊巖寺の谷向かいに「泰心工房」を設立。現在は公共施設の机・椅子・ベンチ等をはじめ、主として板ものを中心とした受注形式によるオリジナル作品の制作を行なっている。氏のコンセプトには「ただの板切れが手を加えることによって生活用具として使われることへの喜び」や「ベンチなら座り心地の良さや美しさ」を求めながら、「あなたの希望を聞きながら、利用者の立場に立って、温かみのある家具を創り出します」と標榜、同時に材料の源とも言える里山の植林や造林活動を同志や仲間と随時行なっている。西岡氏の主たる受注実績は以下の通り。

- ・福岡県八女市横丁町家交流館のテーブル・ベンチ
- ・福岡県星の村茶の文化館 茶のみテーブル
- ・佐賀県武雄市立図書館のテーブル・ベンチ
- ・福岡県山田市立図書館のテーブル・ベンチ
- ・福岡県柳川市立「水の郷」のロビーベンチ
- ・長崎県佐世保市民ホール「アルカス」のロビーベンチ
- ・福岡市赤煉瓦文化館福岡市文学館のテーブル・ベンチ一式（藤原恵洋の空間デザイン監修による）

こうした西岡氏が幾多の候補地を吟味しながらも同地を最終的な定住の場所として探し出したのは、（1）材料確保と乾燥・保管の空間確保、（2）制作作品の展示や販売に対する流通性を担保（3）卓抜な棚田景観、（4）背景となる里山への関心、（5）臨済宗古刹周辺の精神的に落ち着いた風土性、（6）地域社会の受け入れに関する包容性、といった利点を総合的に判断してのことであった。優れた技術や卓抜なデザイン力を基盤とし、木工家としての実績を着実に生み出してきた。エリアは福岡県内のみならず県外各地からの発注を受けるようになっている。クライアントに対しては「メンテナンスは、私が生きている限り致します」と言う。遠路訪れるクライアントも多く、工房の一角を用いたショールームは随時公開されており、同氏の作品展示が行われている。またよりスケールの大きな大作品は旧笠原東小学校体育館に保存展示されている。こうしたデザイン力は内外に高く評価され

ており、同地では「風の人」としての創造触発作用をいかに発揮している。

また一方、氏の樹木に対する理解や愛情は、工房設立後、周囲に広がる里山に働きかける植林活動・造林活動を発起、その後、多様なクライアントを巻き込んだ活動として展開しており、現在も年に二回の定例作業を続行している。氏の工房には次の銘板が掲げられている。「木は人の心と体を癒す力があると思う。手触り、におい、空目の美しさ、そして、時代を生き抜いてきた強い生命力。深夜、工房に横たわる木に、そっと手を触れると、微かに脈打っているようにも感じられる」こうした樹木への洞察は森林保存再生の理解と普及効果となって多くの仲間たちを先導している。

以上の二点を中心にした聞き取りは、同氏のショールーム、工房、ならびに野外の椈の樹木の下に広がる談話スペースで行なわれた。「この椈の木も30年前に植えたものだ」という氏の実践が織り成した工房周囲の雑木林の成長ぶりを見上げながら学生諸君は驚くばかりであったが、「いつからでも遅くない。君たちも今からでも同じことはやれるはず」と「風の人」の強い示唆が印象的であった。

4. 学内における合評会

学生の発表内容は次のように大別することができる。

1) 地域の資源を通して、「えがおの森」をコミュニケーションの場として有効に活用する。

遊び場を散策ルートでつなぎ回遊する。森をつくり造形活動による創造の街づくりを行う。自家製味噌の味噌づくり教室を開催して地元住民や観光客が新しいコミュニケーションを構築する。八女茶のブランド力を活かして新たな料理を創出する。お茶の木や棚田のオーナー制度を活かした都市生活者との交流。文化遺産や産業遺産の復元と新たな休憩施設の設置を通して外来者と交流する。地域の資源や環境を活かした大運動会を実施して地域と都市生活者のコミュニケーションを育む。空き地や道路脇にテーブルを設置してお茶会を復活させるといった内容である。いずれも「えがおの森」とその周辺の資源を融合させた提案であり、地域の集団的な日常の伝統的なコミュニケーションの復活、中山間地の生活者と都市の生活者のコミュニケーションを重視している。

2) 「えがおの森」の再利用に取り組む。

フリースクールとして学校の機能を再利用する。村の文化情報の集積場所また発信場所として再利用する。お茶の地域文化を通じた同窓会の開催場所やイベントの開催場所として再利用するという内容である。この提案は、「えがおの森」が学校跡ということから、元の機能に着目したものということになる。フリース

クールに関しては、地域の人口増加とも関連する。

3) 地域資源を活かした新たな製品の商品化を行う。

伝統的に食されてきた味噌入りの焼き餅をリデザインして地域ブランドにするという内容である。この提案は黒木町を観光地として捉えたものである。

4) 地域の過疎化を新たな方法で食い止める。

空き家オーナー制度を地域の豊かな資源活用と連動させるという内容である。この提案は、定住する、別荘や工房として使用するという空き家の多目的な役割を前提にしている。

5. この演習に対する学生アンケートの結果、地元の方々の反応

5.1 受講生のアンケート結果について

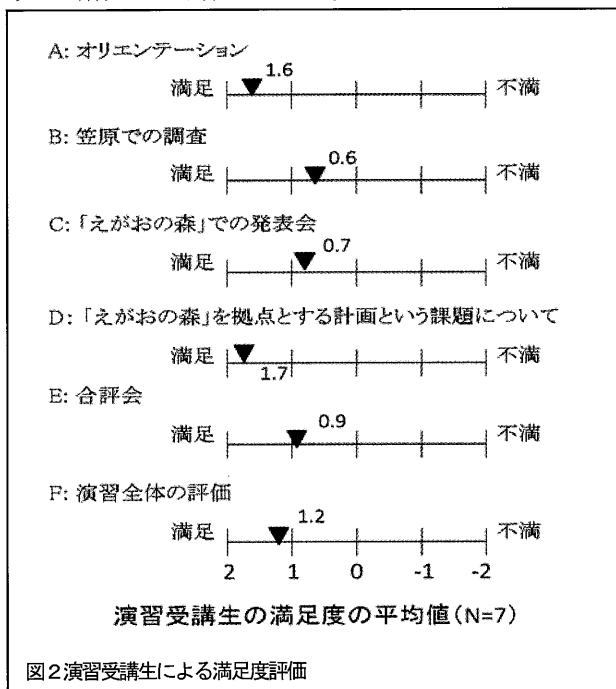
本演習は、農山村における現実の問題について、フィールドを通じて学生が考え、提案する内容であった。この一連の過程に対し、学生の参加の動機はどうであったか、演習の方法や理念は学生に伝達されたか、個々の満足度はどうであったかなどについて、演習が終了した後（調査期間：2008年8月1日～9月30日）にアンケート票を用いて調査を行った。アンケートの回答者数は受講者数22名中、7名（男性：4名、女性：3名）にとどまり、回収率は31.8%であった。その概要について下記に報告する。

まず、受講動機について記述式でその理由を尋ねたところ、現地を実際に訪れることにより町の魅力に触れ、新しい手法を学び、提案を行いたいという点に興味を持たれていた。

次に、「A：オリエンテーション」、「B：笠原での調査」、「C：えがおの森での発表会」、「D：えがおの森を拠点とする計画」という課題について、そして「E：演習全体の評価」について、5段階形式で満足度の評価を尋ねた。その結果を、図2に示す。最も高い満足度が得られたのは、Dの計画対象であった。奥八女の持つ魅力に加え、中山間地の抱える問題解決の必要性について理解されたと想定される。次に高い満足度が得られたのは、Aのオリエンテーションであった。これは、本対象地が重松、朝廣および研究対象としている学生の研究蓄積があり、原からの説明も演習の導入として効果的であったと考えられる。一方、Cの現地発表会やBの調査などの現地における活動、およびEの大学での合評会については、少なからず改善の指摘が得られた。指摘点を要約すると、「調査の目的と方法の具体的な提示、および事前準備が不十分なまま自由なフィールド調査の形式がとられたため、調査と発表内容の質が不十分な結果であると感じられた」とまとめられる。また、時期について、農繁期は農家へのヒアリングが困難であること、スケジュールについて、話し合いやデータ取りまとめの時間が不足したこと、資材面で現地にコンピューターやプリンターを十分に配置すべきことなども指摘された。最後に、Fの演習全体の評価は1.2と、やや満足という回答が得られてい

る。

来年度以降については、教員と学生のもつ専門性と多様性の連携を強化し、資源や建物調査を行い、空家の活用方法、八女茶発祥の地のアピール方法、若者を呼ぶ仕組みづくり、そして観光マップの作成などの提案が行われた。



5.2 地元の方々の反応について

当日は農繁期であり、地元住民の「地元学」実施への参加は困難であったが、作業中の茶工場を見せていただいたり、訪問先で聞き取り調査に応じていただいたり、と忙しい中でも調査に応じていただけたことに感謝したい。

かつてこの地区の中心的存在であった小学校が閉校したことにより、やはり子どもの声が聞こえず寂しい、地域で集まる機会が減ってしまったなどの声が聞かれる。しかし、閉校以来、年に数回ではあるといえ、授業で学生が「えがおの森」に泊まり、地域の中で地元の方を交えて活動を行うことで、学生との交流がたびたびあることを、地元の方々は歓迎し、楽しみにしてくださっているようである。菜種の収穫など、今では地元の方もほとんど行っていないような農作業や竹細工・藁細工などを授業として行った際には、なつかしい、うらやましいとの声が聞かれた。

地元学の実践を提案した当初は、やはり多くの地元の方は「この地域にめずらしいものがあるのだろうか？」という反応であったが、学生がこの地域のことや昔のようすを尋ねたり、普段見慣れないものを珍しがったりしているうちに、地元の人同士が昔を懐かしんだり、これもあれもと話が広がっていく様子が見られた。

模造紙を用いたポスターの制作や発表の場で、地元の人々と学生たちがふれあう様子は楽しそうで、小学校にかつての賑わいが戻ったようだった。ポスターを見て、懐かしいねとか、こんなも

のが珍しいのかとか、まじまじと見てくださり、そういった感想を頂くのは今回の演習に参加した学生や教官にとってもうれしく、充実感が得られた。

6. 考察とまとめ

今回の演習は、対象地の主産業である茶摘みの最盛期に当たったため、地元住民からの聞き取りが困難で、遠慮せざるを得なかった点が反省点として挙げられるが、1年で地元が最も活気づく時期であり、製茶工場の見学もできるなど、生業をつぶさに目にすることができた点では、良かったとも言える。また、意を決した茶摘み中の聞き取りも、快く対応していただい、作業の手を止めたり、あるいは「手伝って」と言われて作業に参加するなかで、いろいろな実情を知ることができた。さらに地域の伝統食品である味噌が、かつては麦麴を用いたのが、茶づくりが盛んになったことで大麦の収穫が困難となり、米麴に変わったという背景も明らかとなった。この他、絶妙な棚田や茶畑への灌漑のための水利システムや水車跡の再発見、ならびに、石碑や祠、観音堂などの文化的遺産の記録を行う一方、地区の祭りの担い手不足や、笠原東小学校の休校により運動会が開催されなくなるなど、地域のコミュニティの靱帯が弱まっている実態が明らかにされた。

参加学生からは以上のような調査結果の発表とともに、「えがおの森」を拠点とした都市と農山村との連携・交流や、フリースクール・山村留学の場としての活用の提案、さらに休耕農地を活用した蕎麦、小麦等の栽培による伝統食品や新たなブランド品の生産・販売を通じた地域活性化などの提案が行われるなど、現場での実地調査に基づく演習の効果が得られた。

今後の課題として、学生へのアンケート調査から指摘されたように、①演習の実施時期の再検討、②調査の目的とテーマ設定、調査方法の明確な事前提示、③グループ討論や成果の取りまとめに対する十分な時間配分と、パソコン、プリンター等の機器の余裕ある配備などが挙げられ、次年度の演習実施に活かされる必要がある。

今回の演習の実施により、地元の人々が若い学生が地域にやってくることに賑わいを感じ、聞き取り等の交流を通して身近な自然資源や文化遺産、生活文化を再認識し、自信を取り戻すこと、また学生達も農山村の環境や生活文化、実状を認識し、視野を広げることにより、連携協力のリーダーや企画・設計家等の人材が養成されることを考慮すれば、その意義は大きいと言える。

今後の展望として、この演習を今後も継続するのみならず、農作業体験等も組み合わせることにより、地域住民と学生の交流がさらに深まること、またこの地域の文化や自然の保全、継承につながることを期待したい。



写真1 演習実施拠点施設「えがの森」



写真2 グループの現地発表風景



写真3 グループのよる現地発表用ポスター



写真4 演習実施時に盛んにおこなわれていた茶摘み風景



写真5 椿原地区の味噌甕

参考文献

- 1) 中村尚司・広岡博之編：フィールドワークの新技法，日本評論社，pp.6-9，2000
- 2) 重松敏則・朝廣和夫(2008)：「農山村の地域資源を活用した環境共生教育に関する拠点形成プログラムと情報システム」、平成 17～18 年度科学研究費補助金（基盤研究B）研究成果報告書、全96 頁
重松敏則・小森耕太・原 愛子・船越亜紀・朝廣和夫(2007)：「第 10 回 国際里山・田園保全ワーキングホリデー in 福岡」報告書、同実行委員会(山村塾・黒木有機農業の会・黒木町林業振興会・九州大学芸術工学研究院 重松研究室)、全26 頁
- 3) 松藤有希・重松敏則・朝廣和夫(2007)：「都市と農山村の交流を目的とした若者の農林体験学習について～福岡県黒木町での活動を事例として」、日本造園学会九州支部研究・事例報告集、Vol. 14、pp.77-78
- 4) 吉本哲郎 (2001)：「風に聞け、土に着け 風と土の地元学」、『現代農業 5 月増刊 地域から変わる日本 地元学とは何か』、p.195、農山漁村文化協会